

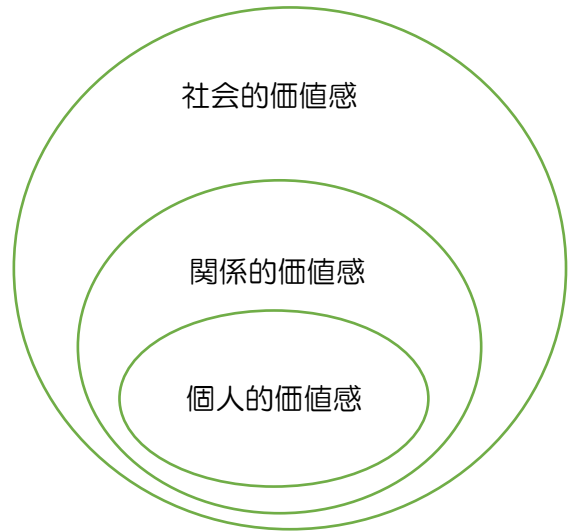
モラルジレンマ授業

2023・2・7 重枝 一郎

前号で、教科の授業改善や探究学習の指導法において、「道徳の指導」等を参考にできると思うという話を書いた。今号は、その指導の中で「モラルジレンマ授業」の話をしたい。

私は、会議で協議するときは、この「モラルジレンマ授業」を意識するときがある。会議は、ディベートではない。その立場にこだわって戦うものではない。だから会議も「ジレンマ授業」の考え方になる。

私は、道徳の時間に「ジレンマ授業」をよくやっていた。まずは、誰でも自分の考えをもつ。ただそれだけだと、それは「**個人的価値感**（あえて「感」）」である。当然 180 度違う反対の考えもある。その考えをわかった上で自分の考えをつくる。これは、「**個人的価値感**」から「**関係的価値感**」へ高まっていることになる。つまり、違う考えを尊重した上で自分の考えをもつということである。それは、生徒の発言等で「〇〇さんの意見は・・・なので・・・」からわかる。実は、以前から言っている「**白黒思考をしない**（校長研修だより 46 号）」という話にもつながる。2つの対立する考えに対し、両方の理由を言えた上で自分の考えをつくる。



私はシンプルにこの授業で、「**個人的価値感**」から「**関係的価値感**」に高まる経験をつかませたいと思っていた。それは、その後の教科の授業等での思考の質を上げるコミュニケーション力等にプラスの影響を与えていたと思っている。

以下そのことについて例示的に大枠を述べる。

■ALを取り入れた道徳授業について（「読む道徳」から「考え議論する道徳」）

『道徳科における問題解決的な学習は、生徒一人一人が生きるうえで出会うさまざまな道徳上の問題や課題多面的・多角的に考え、主体的に判断し、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習である』

↓
主体的に取り組むために、対立している（ジレンマ）問題を取り上げる

たとえば・・・

- ┌ 「寛大な心をもって他人の過ちを許す（相互理解・寛容）」
- ├ 「法やきまりの尊重で自分勝手な反発を許さない（規則の遵守）」
- ├ 「理解し合い、信頼や友情を育む（友情・信頼）」
- └ 「同調圧力に流されない（公正・公平・社会正義）」

↓
発問を工夫してジレンマを起こす

「その解決策を行った場合、結果としてどうなる？」（因果関係）
 「相手の立場から考えると、この解決策は公正・公平か？」（可逆性の追求）
 「誰もが同じように行動したらどうなるか？」（解決策の普遍性を探求）
 「その解決策で利害関係者がみな幸せになれるのか？」（互恵性の追求）
 ※多面的・多角的

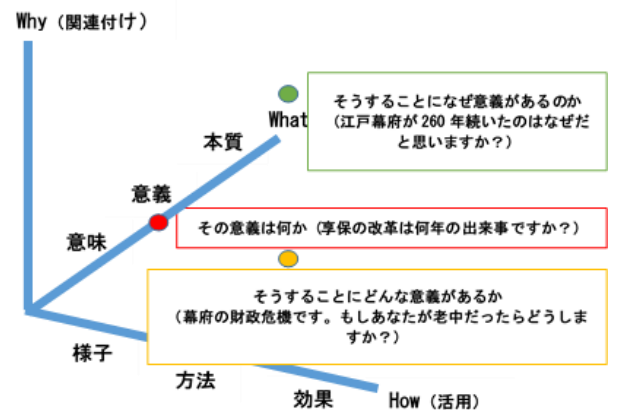
↓
学習形態を工夫して参画させる
 「対話的学び」グループを活用し、全員参加型にする（AL）

↓
道徳的価値と関連付けて省察させる
 自他を尊重し合い、責任のある発言をする、相手の話を傾聴する、共感的に理解しあう【道徳的体験】
 異なる意見を出し合って互いに認め合う、納得し合える形で合意形成する【道徳的判断力】【道徳的心情】

- ※さまざまな課題や問題を主体的に解決する学習になっているか？（AL）
- ※これまでの認知的側面だけでなく行動的側面も重視（AL）
- ※小中学校の道徳科は、高校での新教科「公共」に矛盾なくつながっていく（判断して解決する力、他者との関係性をつくる力）

■問いの構造化

- 問いを構造化し、必要なときにその状況に応じた形で問いを活用できるように（How・Why・Whatの組み合わせ）
 - 生徒の主体性を引き出すために
 - 生徒の自我関与が高めるために
 - HowにWhyを絡める（なぜそうしたのか？）それにif, if notを絡めると広がり、深みをもたせることができる。
- (if, if not)
- もしそうしたら（しなかったら）
 - もしそうだったら（でないなら）
 - もしそうでないならどうということになるか



■理想の「問い」

生徒の一生の記憶に残り、心に問い続け、成長につれて答えが変わっていくような問い。